

お彼岸特集

～お彼岸は日本独自の風習～

お彼岸について

お彼岸は日本独自の仏教行事です。「彼岸」という言葉は、私たちが生きているこの世「此岸（しがん）」に対して、煩惱や迷いから脱した仏さまの世界「向こう岸」意味しています。季節の節目にお墓参りや法要などを行ない、ご先祖様に思いを馳せ、供養します。お彼岸の始まりは聖徳太子の時代にさかのぼるといわれ、古くからある日本の風習になります。



お彼岸は春と秋の年 2 回

3 月の春分と 9 月の秋分の日を中心に前後 3 日、それぞれ計 7 日間を指します。春分・秋分の日を中心に行われるのは、昼と夜の長さが同じになり、真東から太陽がのぼり、真西へ沈んでいく日であるためです。

仏教において極楽浄土があるとされるのは「西の彼方」です。太陽が真東からのぼり真西へ沈む春分・秋分の日、この世と極楽浄土が通じやすいと考えられるようです。

お彼岸のお供えもの

春と秋のお彼岸にお供えする代表的なものが、春は「ぼたもち」、秋は「おはぎ」となります。基本は同じもので、春に咲く牡丹の花にちなんで「牡丹餅」、秋に咲く萩の花にちなんで「お萩」と呼び分けるといわれています。

地域によっては、こしあんを「おはぎ」、粒あんを「ぼたんもち」と呼ぶところや、きな粉をまぶしたものを「おはぎ」、あんを「ぼたもち」と呼ぶところもあります。

お供えものは、ぼたもち、おはぎの他に果物やお菓子など。故人が好きだった花や好物など喜んでもらうものをお供えしてもよいでしょう。



地方のお彼岸行事や風習

お彼岸は一般的にはお墓参りや法要を行います。が、地方によってまつりや行事をすることもあります。

● 福島県

◎ 会津地方

～会津彼岸獅子（あいづひがんじし）～

会津地方では春彼岸に獅子舞が行われます。長い冬が終わり、春の彼岸入りとともに、三体の獅子が古式ゆかしい舞を披露。笛と太鼓の音色に合わせ、獅子が市内を練り歩きます。豊作と家内安全を祈り、春の訪れを喜び合う伝統行事となります。



会津彼岸獅子

● 広島県

◎ 熊野町

～安芸熊野 筆まつり～

全国における筆生産量の 80% を占める熊野町で、昭和 10 (1935) 年に第一回が開催され現在まで、秋のお彼岸の中日に「筆まつり」が毎年行われています。大きな筆で書かれる「大作席書」や筆供養、筆の市、競筆大会や「彼岸船」と呼ばれる大きな船が町内を練り歩く一大イベントです。



筆まつり（写真提供：広島県）

● 九州地方

～彼岸籠り（ひがんどもり）～

九州の限られた地域で行われる風習で、お彼岸の時期に山に籠ることや集落の神社に集まりお酒を酌み交わすというものです。地域の安寧や無病息災を祈り、五穀豊穡を願うという意味が込められています。

● 沖縄地方

～屋敷の御願（やしきのうがん）～

沖縄ではお彼岸のない地域も多く、お墓参りに行くことも多くはありません。その代わりに「屋敷の御願」を行うのが、沖縄のお彼岸といわれています。台所を守る火の神「ヒヌカン」とお仏壇「トートーメー」に御馳走をお供えて、家内安全・健康祈願を祈ります。また「ウチカビ」というお金を模した紙を焚いてお金をご先祖様に捧げます。「屋敷の御願」は春と秋のお彼岸、年末の 3 回や夏と年末の 2 回など地域でさまざまです。